



# 月報 岡崎の教育

10月号

昭和59年10月1日  
編集／発行  
岡崎市教育委員会

今日も

二十分間の読み聞かせが始まる。

子どもたちは

目を輝かせ

聞き耳を立てる。

「「こんどは、しらないおとこのこが  
とおせんぼをしました」さて、エ  
ンがエーンエンとなくなかな。ケラ  
がケーラケラと……」

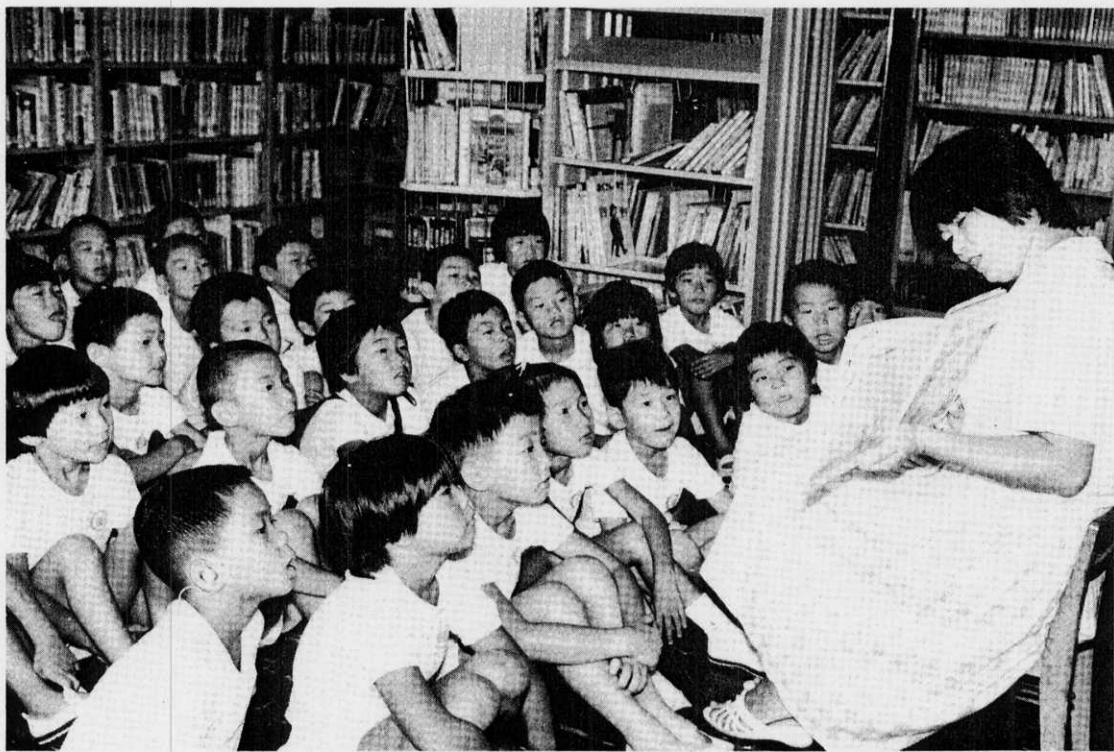
何とも言えないどよめきが起こる。

「おこるに決まっとるじゃんか。」

「そうかな。泣くかもしれないよ。」

子どもたちと先生の

楽しい読み聞かせが続く。



(朝の20分間読書—根石小)

## — 教育随想 —

## 畏敬



## 鈴木 日出年

明治四十二年九月、私は今の岡崎市森越町に生まれ、小学校の二年の時、村を離れました。当時は矢作町字森越と言っていました。この森越の長寿寺に先祖の墓がありますので、春秋には展墓に参りますが、望郷の思いにかられる時、まず臉上浮かぶのは、少年の頃遊んだ矢作川の白い川原と清澄な流れであるし、蜿蜒と続いて美しい曲線を描く十里長堤の姿であります。

その頃の村のくらしは決して豊かではなかったけれども、村には五厘で飴玉を売ってくれる駄菓子屋もあつたし、北野まで行けば粉と換えてくれるうどん屋もありました。そして、長瀬八幡宮の昼高暗い森は勿論、触越・橋目・北野あたりは少年の日々の遊びの圏内でした。

それにもまして待ち遠しかったのは、盆と正月とお祭りの楽しさでした。また、

秋から冬へかけての夜は灯を囲んでの温かい家族の団欒がありました。その反面、戸外は闇の世界で、そこには不気味な怖さがありました。この様な昼と夜、灯と闇の二つの世界の中にいた少年の頃がなつかしく思い出されます。

現代の少年たちを気の毒に思うのは、彼等には私たちの経験した様な、楽しく、あるいは、怖い自然との関り合いが少ない事です。私たちは広い意味での駄と言ふ事の中で、村のしきたりなどを始め、「勿体ない」、「神様や仏様は何でもお見通しだ」とか、「神様や仏様は罰を当てられる」とか言つた叱り方をされた事に大きく感化されました。

その頃の村は夜ともなれば、まばらに点在する家々を包んでの闇は濃く、深かった。その闇の中から目に見えないものに対する畏敬の念が自然に芽生えたので

あります。現代では科学的合理主義の教育偏重から、目に見えないものの存在は総て否定され、その結果、神様たちの居られる底知れぬ闇も、罰を当てる神様も、何でもお見通しの神様、仏様たちも消滅してしまいました。従つて、宗教的な芽生えとも言うべき怖れも、それに伴つての反省あるいは慎しみも、身につける機会の一つ一つがなくなつた事は、今の少年たちの人格形成にとつて測り知れない損失であろうと思います。

現代は新聞、テレビ等に青少年の非行に関する記事のない日はありません。そして、多くの人々がそれぞれの立場で、まことに立派な処方箋を書いておられます。私にはその様なものはありませんが、私たちが少年の頃経験したものの中で、今も生々しく思い出すのは、神様や仏様の事です。その素朴な経験が自分の人生に、行動の規範として生き続けています。それを今もありがたく思っています。

今の世の親たちや教育に携る人々にお願ひしたい事は、そうした経験のない、あるいは、少ない少年たちに、せめて大人たちが、昔語りの中で神様や仏様の存在を自分たちの生活体験を通じて話をして頂きたいということです。そうすれば、必ずや少年たちの心の豊深く、脈々として生き続け、彼等の人生の道しるべとして役立つに違いないと思うのであります。

(京都市八坂神社宮司)

## 甘言苦言

## 読書



## 私の読書体験

梅園小学校長

内田 松夫

私は元來読書好きではない。そこで、せめて子供たちには読書好きになつてもらうと努力してきた。先生方にも読書の機会を作るよう工夫してきた。

読書好きでもない私の読書体験を顧みると、先輩からの勧めや、職務柄の必要性を動機としたものがほとんどであった。学校やグループで行つた読書会とか読書発表は、読書嫌いの私には貴重な体験の場であつたと感謝している。

読書はもともと個人的なものであつて自由で主体的に行われるはずのものだ。読書嫌いな私でも、若い時には自らの意志で読書に励んだ時もある。読んだ本はほとんどが深い思索を必要とした。言つてみれば、重読書の体験であつた。それが今の私の生き方、考え方を大きく規定しているように思っている。

読書習慣のついていない私は、年齢を重ねるに従つて、重読書に耐えられなくな



# 音楽は生涯の友

兵藤 進一 氏

午後七時半、菅生川畔の「太陽の城」は、暗闇の中にすっかり身を隠していた。三階のホールでは、すでに「岡崎『第九』をうたう会」百余名の力強い発声練習が始まっていた。

ロビーで兵藤さんを待っている間も、勤め帰りの人たちが、三々五々会場へ入っていく。ドアが開かれるたびに、ドイツ語の響きが一塊となつてこちらに押し寄せてくる。みんな自主的に「第九」を歌いたいという人たちだけに練習にも力が入っている。

兵藤さんは、現在「岡崎文化協会」岡崎音楽友の会（旧岡崎労音）「第九をう

たう会」のリーダーとして幅広い活動をされている。

「特に労音は、二十五年間、三九九回の例会に携わってきただけに思い出深いものがあります。よい音楽を、安く、多くの人たちに聞いてもらうのが趣旨でしたが、会場難や赤字問題等の難題にいつも直面していました。それだけにそれら乗り越えて、みんなで音楽会を成功させた喜びは、何ものにも代え難いものがありましたね。」

昭和五十六年、労音は惜しまれながらその歴史を閉じ、「音楽友の会」となつて新たな歩みを始めた。

また、兵藤さんは、長い間、沈黙を続けていた岡崎文化協会の再興にも力を注がれ、昭和五十年、労音委員長の立場から設立発起人会を開いた。

「会長に中西正雄さん、副会長に加藤庄一さんと浅田蓬村さん、会計に私、他に十三名が理事となつて、岡崎の自主的な文化活動のために東奔西走しました。お陰で現在では、「音楽友の会」を含め、一三九団体が加盟するほどになりました。この『第九をうたう会』も市内の合唱団を中心に組織され、協会との共催で、昨年、第一回の演奏会を開いたんですよ。」

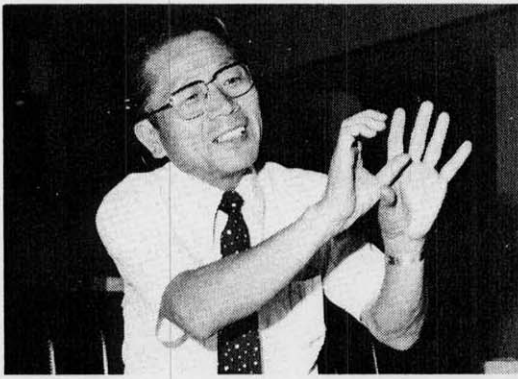
市民の手づくりによる第九の演奏会は、兵藤さんの長年の夢というものであった。「合唱は協調の芸術です。さまざまな個性と人生経験を持った人たちが、心を通わせながら、音のハーモニー、人の

和のハーモニーを作り上げていく。合唱のよさは、ここに極まりますね。今年も二〇名のメンバーが、十二月六日の演奏会に向けて、週二回の練習をがんばっている。

「岡崎らしい、温かい第九にしたいですね。昨年は無我夢中だったので、今年は、技術的にも、より高く、音楽性豊かに歌えるようにしたいですね。先生方もぜひ参加して楽しんでください。」

岡崎「第九」は、年の暮れの風物誌として岡崎の地に定着しつつある。兵藤さんの、この音楽文化への限りない情熱は、必ず心豊かな市民生活の大きな力となつていくにちがいない。

（生年月日 昭和二年六月十五日）  
（住 所 岡崎市岩津町字生平八七）



つてきている。ここに原稿を依頼されたのを機に、いつの間にか軽読書に走っている我が身に、時には重読書をすべし、と苦言を呈しているところである。

## 読書雑感

福岡小学校長

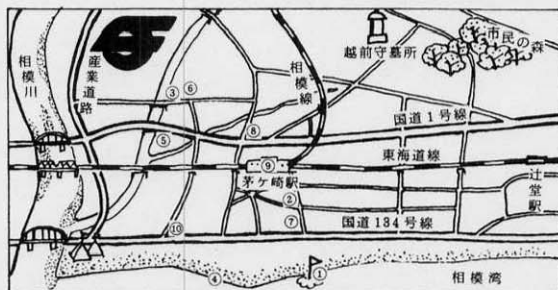
鈴木 義治

「人生において或る意味では習慣がすべてである」読書について「先ず大切なことは読書の習慣を作るということである」——これは三木清著「読書と人生」に出てくる名言である。

人は、人との出会いによつて読書生活に入っていくものであろう。平家物語、この本は恩師杉浦宗一先生（元加木屋南小学校長、現桐華家政専門校長）が、離任に際して私にくださつた本である。私の読書生活に灯をともしてくれたのが、この平家物語であり、以来愛読の一書となつている。教壇に立つてからも、古典に心をひかれるようになり、徒然草もまた手もとの一書となつている。

本校では有志研修の形で読書会を今も継続しているが、芦田恵之助先生の「国語教育易行道」は、今も教室訪問のおり脳裏をかすめている。読書習慣と何を読むかは相互に関連をもつものであるが、やはり古典的図書をひもとくことは、必要ではなからうか。

最後に、教師なるがゆえに、ぜひ読んでいくべき本は、児童図書であることを付記したい。



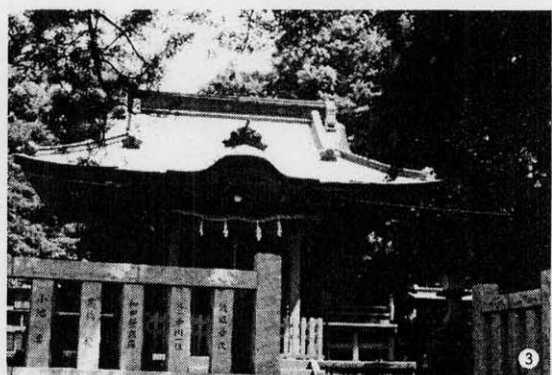
ゆかりの町を訪ねて

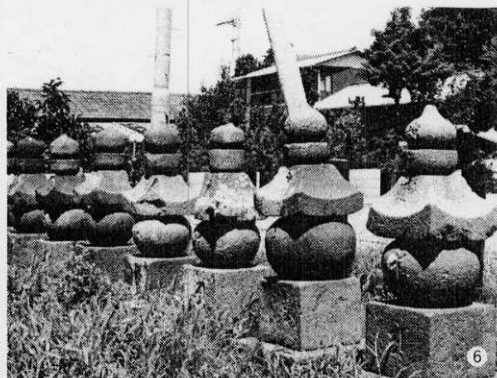
# 茅ヶ崎市

その2

茅ヶ崎市は、北に相模原台地の南端丘陵部を取り込み、南は相模湾に面する。東の藤沢市方面へ海岸沿いに砂丘地が伸びる。その内側、中央部から西にかけては相模川の沖積地が開け、西端は相模川をもって平塚市と接する。明治三十一年、東海道本線茅ヶ崎駅開設を契機として気候温暖なこの地の砂丘地が保養地として世人の注目を浴びるようになった。以来、順調に発展し、昭和二十二年には四万余人をもって市制を施行した。ところが、戦後の首都圏の膨張よりはすさまじく、東京駅まで一時間という当地も、三十年代後半から急激に住宅が増加して東京への通勤圏に組み込まれた。現在は十八万都市。人口密度は一平方キロあたり五千人余の高密度である。急激な人口増加がもたらすひずみは教育施設面にも及び、小学校の児童数は一校平均千百九十二名（茅ヶ崎市勢要覧一九八四）による」という。かなりの大規模校があり、地価の高騰で学校用地の確保が難しいという状況を反映している。

急速な都市化は、ときとして住民どうしの疎外感を生みやすい。そこで、茅ヶ崎市ではお互いに人間としての誇りを持ち、心を通わせ合い、住民どうしの隣人愛で結ばれたコミュニティを創出しているという運動が進められている。「われら市民家族」こんな意識が着実に育ちつつある都市である。





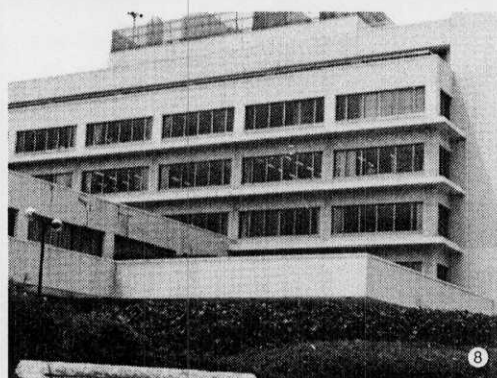
6



5



7



8



10

- ① 茅ヶ崎海水浴場。白砂青松の浜は人波で埋まる。夕映え富士も美しい土地。
- ② 西行歌碑。鎌倉時代初期、西行法師は当地を通りすがり、「しか松のかすのしけみにつみこめて砥上ヶ原にお鹿なくなり」と人の世の寂しさを歌った。文化資料館の門柱（鶴嶺八幡宮鳥居の古材）に刻まれている。
- ③ 鶴嶺八幡宮。建立は平安時代、茅ヶ崎の総鎮守として信仰を集めた。
- ④ 暁の夏祭り「浜降祭」。毎年七月十五日早暁、相模国一宮寒川神社の神輿を中心に五十基が茅ヶ崎の浜でもみ合う。禊祭の一種で県無形民俗文化財。
- ⑤ 旧相模川橋脚。鎌倉時代初期、源頼朝の家来が架橋した時のものと伝える。関東大震災の折、突如として水田から橋脚七本が現れた。国史跡。
- ⑥ 龍前院五輪塔十基。銘文は故意に削られているが、南北朝から室町初期にかけての支配者の墓碑であろう。鎌倉にもこれだけの数の五輪塔はない。
- ⑦ 国木田独歩追憶碑。明治四十一年、独歩はこの地の結核療養所で永眠した。
- ⑧ 茅ヶ崎市役所。人口十八万市民のシンボル。室内が明るく、利用者に便利。
- ⑨ 茅ヶ崎駅。現在鉄道で二分されている市街地を結ぶ橋上駅として改装中。朝夕は京浜方面への通勤客で溢れる。
- ⑩ 公団住宅群。市内には八十数棟を数える公団住宅が二か所もある。



9

# 教育日々



## 目下、悪戦苦闘

城北中 天野 道晴

「一学期、毎朝迎えに行ったA子は、順調に登校できるだろう。部活をさぼり勝ちになつたB男やC男はどういうつもりなのだろうか。家庭の複雑そうな転校生のD子はどんな子だろう。宿題はどの子も片付いたのだろうか。」

新学期を迎え、私の脳裏に生徒たちの顔が、次々に浮かんできた。もうじつとしていられない。学校の自転車を借りて顔を見に行く。

「顔さえ見ればそれでいい。」そんな気持ちで自転車を漕ぐ。我ながら滑稽に思いながらも。

さあ、いよいよ新学期。折るような気持ちで教室に入った。



あつ、A子がいた。B男もいる。思わず叫びたくなるような喜びが走る。A子の心の成長に対する期待と、少し楽になるかなという思いとが私を喜ばせた。

授業後、欠席したC男を訪ねた。不気味そうなC男と不思議そうなC男の母親の顔が対照的だった。母親の話はこうである。「今朝は元気に家を出ました。帰りが少し早かつたのでおかしいとは思いましたが……」

C男は、登校を装い、公園で時の経つのを待っていたのである。部活が原因であることと次の日出てくることを確認して学校へもどる。妙に自転車のきしむ音が胸にしみた。

二日目、「学校に行く道がわからない。」

というD子からの電話に苦笑しながら迎えに行く。その間、A子の母親が登校し、「明日から迎えに来て。」

という短い言葉を残して去っていったとか。今日もC男は来ない。聞けば、前の日の繰り返し。ウクレレでも持つて「あやんなっちゃった」なんて歌いたい心境。自転車がきしむのも無理はない。

二学期が始まり、一週間余が済んだ今、B男とC男は部活を変えて落ち着きを見せている。D子は学校に慣れてきたようだ。A子はいよいよ変わらずだが、もつか二連勝中（二日続いてクラス全員が登校）である。どうやらこの悪戦苦闘は一年間続きそうだが、勝ち越しを心に誓う。

「おい、みんな、出てこいよ！」明日は自転車で、油をさしておこうつと。

## いつも子どもの中で

三島小 佐藤 裕子

「先生、二ワトリにあげるから家からミニズ集めて来たよ。」夏休みの工作ね、ソリにしたこれ。」

と、話しかけてくるH男は、気は優しいが、落ち着きがなく、

四年生の他の子に比べるとワンテンポずつ遅れやすい子である。そのためか、まわりの子から、「あああ、またH男。」

「H男。ちゃんとやれよ。」と、追いたてられるような声を聞くことが時々あった。このままではいけないと思いつつもH男の屈託のない「アハハハハ。」という笑い声に流されて、何とか学校生活をおくらせていた。

「病院に寄つてから学校へ行きます。」と、連絡のあつた朝の会、この時だと思つた子どもたちの本当の気持ちを確かめてみた。「だって、H男、自分勝手なことばかりしてるから、班で動く時、困るもん。」

「受けもしないのに、変なこと言うしな。」

「じゃ、いやな所ばつかりなの。いない方がいいと思つてるの。それでいいの。」

「ううん……」

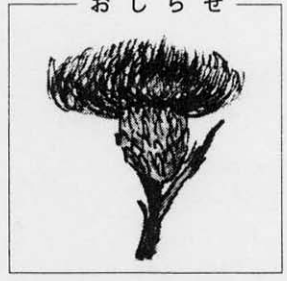
「……H男、いい所もあるんじゃない。だって、動物好きだし、友だちとの約束にうそをついたりしないよ。」

そんな話し合いをした数日後、同じ班の、ある男子が日記の中にこう書いてきた。

わかつた。一年から四年までもだんだん変わつている。人より遅れをとるといふことは、自分が真剣にやつていないといふことだから、そういう所はいけないと思つけれど、H男君も、一・二・三年の時と比べるとだんだん変わつている。悪い所もあるけど、いと楽しいから、やつぱりいい所もあると思うよ。」

他の子どもに課題を投げかけつつも、既に半ば決めつけていたH男への低い評価の姿勢に、私は喝を入れられた思いだった。つねに、子どもたちとともに、新鮮な目で見、その良さを見出し、出していこうとする態度を取り戻さなければと教えられたことしきりである。





(寄贈刊行物・資料等)

- ◆ 広小三余 第六号 広幡小 現職教育誌 B 6七六ページ
- ◆ 道徳年間指導計画 六名小 昭和59年度 第一次試案 B 5二二四ページ孔版印刷
- ◆ 読書の記録 校務主任会 B 5 孔版印刷

- ◆ 佐藤玄彦 一人と業績 B 6 二八四ページ 「佐藤玄彦先生追想の記」刊行会 代表者 神谷卓爾
- ◆ 研究集録 第四集 常磐小 基礎学力の育成 B 6 五四ページ

### 第五回岡崎市中学生海外都市親善使節団

### 姉妹都市提携間近の ニューポートビーチ市へ

岡崎の将来を担う中学生に国際的視野をもってもらうようと、昭和五十五年から始まった中学生の海外親善使節団は、今年、姉妹都市提携が予定されているアメリカのニューポートビーチ市などを訪問する。

市内中学生の代表として選ばれ参加する団員は、織田正人君(福岡中)、田中清隆君(東海中)、橋爪みちるさん(城北北中) 穴戸久美子さん(常磐中)、いづれも中学三年生。付き添いとして、本田元子教諭(南中)、石川佳宏教諭(矢作中)、市教委からは、涉外などの任務で岩月係長が同行する。主な日程は次の通りである。十月十二日(金)成田発

- 十三日(土)サンフランシスコ
  - 十四日(日)サンフランシスコ
  - 十五日(月)ロサンゼルス
  - 十六日(火) ニューポート
  - 十七日(水) ビーチ
  - 十八日(木)
  - 十九日(金) ホノルル
  - 二十日(土)
  - 二十一日(日)成田 着
- 電美丘小が特選・県知事賞 愛知県と県緑化推進委員会主催の学校環境緑化コンクールにおいて、電美丘小学校が特選・県知事賞を獲得。全国学校環境緑化コンクールへの県代表となった。常磐小学校も特選・県緑化推進委員会賞。広幡小・常磐中の両校は入選・県教委賞。学校林活動コンクールでは河合中学

校が入選・中日賞に選ばれた。■全国学校給食優良校に羽根小 去る九月六日、東京九段会館で、学校給食法制定三十周年の記念式典が開催された。席上、羽根小学校が全国学校給食優良校。広幡小学校長・伊豫田参吉先生が全国学校給食功労者として、それぞれ文部大臣より表彰された。■NHK全国学校音楽コンクール、六ツ美北部小が県代表に 十月二十四日愛知年金会館ホールで開催されたNHK全国音楽コンクール県大会には、六ツ美北部小学校、矢作中学校、福岡中学校の三校が西三河代表として出場。六ツ美北部小学校は見事、県最優秀校に選ばれ、東海・北陸大会へ愛知県代表として出場することになった。矢作中学校は優秀校に選ばれた。■全国自作視聴覚教材コンクールで優秀賞獲得 昭和五十九年度、全国自作視

聴覚教材コンクールで、視聴覚ライブラリー自作委員会と現職教育社会科部共同制作のビデオ作品「公害を考える」が見事、優秀賞を獲得。表彰式は、十一月二十一日、東京で行われる。■健康優良児童・生徒 九月七日、実地審査の結果、次の児童・生徒が選ばれた。

- 小学校の部
  - 岡崎一 附属小 宮田 広樹
  - 廣幡小 坂巻 智子
  - 三島小 市川 典正
  - 六名小 加藤 重典
  - 根石小 鈴木 麻日
  - 愛宕小 石川奈緒美
- 中学校の部
  - 岡崎一 福岡中 細江 孝久
  - 福岡中 杉浦由紀子
  - 南中 谷津 薫
  - 六ツ美中 都築 清志
  - 美川中 高樫 衣代
  - 岩津中 鈴木 里香
- 県教育委員会学校訪問
  - ▽十月十一日東海中(義務教育課)
  - ▽十月十八日小豆坂小(義務教育課)
  - ▽十一月一日秦梨小(教職員課)
  - 河合中(教職員課)
  - ▽十一月八日岩津中(義務教育課)
- 市教育委員会学校訪問
  - ▽九月二十日 常磐東小・常磐中
  - ▽十月二十五日 矢作東小・新香山中
  - ▽十一月二十九日 細川小

■後期教育実習 十月一日から、二週間ないし四週間にわたつての後期教育実習が開始された。受け入れ校と実習生の数は次のとおり。

- ▽梅園小 一愛教大十名
- ▽緑丘小 一愛教大十名
- ▽連尺小 一名女大三名、名保短大三名、椛山女学園大一名
- ▽本宿小 一岡女短大八名
- ▽大門小 一岡女短大五名、江南女短大一名、名自学院短大一名
- ▽城南小 一岡女短大七名
- ▽上地小 一愛教大四名、名女大一名
- ▽東海中 一愛教大一名、日福大一名、愛淑短大一名、愛学泉短大一名、名女短大一名、名菜短大一名、
- ▽河合中 一名短大一名、椛山女学園大短大一名、
- ▽六ツ美中 一愛教大一名、中女大短大一名、同朋大一名、愛知大二名、愛学泉女短大二名、名自学院短大二名
- ▽梅園幼 一愛教大三名、岡女短大一名、中女大一名、名自学院短大一名、
- ▽広幡幼 一名短大三名、豊短大二名
- ▽矢作幼 一名短大一名、日福大女短大一名、岡女短大三名

# 点



## 臥雲辰致氏記念碑

所在地一岡崎市朝日町

郷土館は大正二年に額田郡中央公会堂として建てられた。当時、当地方唯一の大集会場であった。以後、市の公会堂として文化活動の中心となっていた建物である。近くには小公園もあり市民の憩いの場所でもあった。

その敷地の西の端に、立派な築山がある。松やかえで、いろいろな樹木が茂る中に、高さ三メートル余の、仙台石の立派な記念碑が建っているのに気を止める人は少ない。

碑面は「臥雲辰致氏記念碑」と題され、楷書の美しい漢字がびっしり並んでいる。臥雲辰致は長野県の人で、ガラ紡機の発

明者。十四歳の時、火吹き竹の穴から吹き出した綿花に、よりがかかって糸が紡げることを発見してから、五十九歳で没するまで、一生をガラ紡機の改良に努めた。

この碑が建てられたのは大正十年、三河紡績同業組合の設立を記念するためである。ガラ紡機発明の恩人の頌徳碑背面には組合長野村茂平次はじめ建碑係五十六名の名前が書き連らねてある。時は第一次大戦後の不況下、当地方を襲った豪雨のために業界が大打撃を受けた直後であった。

● カット 緑丘小

南野 薫



*手と目と声と	灰谷健次郎	980
理論社		
*イギリスの10代たち	北村 元	1300
サイマル出版会		
*イワナの謎を追う	石城 謙吉	430
岩波書店		
*やさしき長距離ランナーたち	山崎 摩耶	1000
潮出版社		

*偉大なる暗闇	高橋 英夫	1200
師岩元禎と弟子たち		
新潮社		

岩元禎は、ケーブルの薫陶を受け、旧制一高でドイツ語と哲学を講じた人。強烈な個性と底知れぬ学識の深さ、厳格な指導とで名物教授の筆頭にあげられた。夏目漱石の『三四郎』に登場する英語教師広田先生のモデルといわれ、「偉大なる暗闇」の尊称も転用された。

明治、大正、昭和三代にわたりエリート青年群の精神形成に及ぼした影響は、はかりがたいものがある。

大人たちには知られたくない子どもの読書がある。巷には、「性」に関する本が数多い。こっそり手にする好奇心も、中学生ともなれば当然である。

一方的に禁ずることが指導ではあるまい。健やかな心身の発達を促すために教師と親とが一体となった、適切な指導が望まれる。

猪垣を見に行った。秋の日の鶴巣町、黄金色に輝く田園に、百五十年間、猪の被害を防いできた石垣が残されている。

鶴巣付近には、今も猪が出没するが、猪垣のある所は被害が少なさうである。山々に囲まれた鶴巣で、先人の生活に思いをはせた一時であった。

# オアシス

赤く、大きな夕日が地平線に沈む……。瞬時、あたりのあらゆる物が赤く染まる。そんな光景を子供たちに見せたい。教師も見たい。

詩の教材「夕日がせなかをおしてくる」にせまるため、子供たちをまつ赤な世界で遊ばせたいと、授業日を一週間後に控え、夕焼け空を待っている。

澄みきった空、さわやかな風。スキが銀の穂をなびかせる秋の野辺は虫たちが今年最後のコンサート。小鳥がさえずりながら頭上を渡る。

お互い何かと忙しく、自然の移ろいをつい気付かずに毎日過ごしているが、時には野山に分け入って、命のせんたくもいものだ。